

令和 6 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (1)、(2)

申請組織 外国語学部

申請組織長 役職名 学部長 氏名 藤岡阿由未

統括責任者 役職名 准教授 氏名 マイケル・ストックウェル

課題名 イングリッシュイベント (English Festival) の開催

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	マイケル・ストックウェル	外国語学部・准教授	企画運営マネジメント
		児玉 恵太	外国語学部・准教授	企画補佐

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200字～300字程度で記述)

イングリッシュフェスティバルは、1年生が協力しながら積極的に英語を使用できる機会を提供する年次イベントとして設立されました。実践的なコミュニケーションスキルやチームワークの重要性を踏まえ、本学部は教室を超えた体験型学習を促進するために本イベントを開始しました。

このフェスティバルは、学生が言語学習への意欲を高めると同時に、問題解決力・創造力・協働力といった重要なスキルを育成する場となっています。プロジェクト型の活動を通じて、学生はポスターやデジタルコンテンツを制作し、英語の実践的な使い方を深く理解できるようになります。

さらに、本イベントは英語を使う自信を養うことを目的としており、学生が自らの成果を発表できる支援的な環境を提供します。フェスティバルへの参加を通じて、学生は英語力の向上だけでなく、達成感や協調性を育み、今後の学業やキャリアにおいても役立つ貴重な経験を得ることができます。

2. 事業方法 (特色・独創性) 等 (300字程度で記述)

イングリッシュフェスティバルは、1年生が体験型学習を通じて実践的な英語コミュニケーションを深めることを目的としています。今年度は、協力・創造性・実用的な英語の活用を促進する2つの主要プロジェクトに取り組みました。

1つ目のプロジェクトは、学科全体のイヤーブック制作で、コミュニカティブ・イングリッシュ・プログラム (CEP) の各グループがコンテンツを作成しました。学生たちはデジタル素材の収集・レイアウト設計・構成を担当し、チームワークやデジタルリテラシー、実践的なコミュニケーションスキルを磨きました。

2つ目は、ブックレポート制作で、小グループごとに CEP で読んだ本のポスターを作成しました。これにより、本の内容を議論し、要点をまとめ、視覚的に表現することで、英語を使った表現力や創造性を養いました。

学生主体のアプローチにより、プロジェクトに対する責任感を育み、デジタル・印刷メディアの活用を通じて実践的なスキルも向上しました。英語を実際の課題に応用することで、学生の学習意欲を高め、今後の学業やキャリアに役立つ貴重な経験となりました。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

イングリッシュフェスティバルは、1年生に実践的で魅力的な英語学習の機会を提供し、学科全体のイヤーズブック制作とブックレポートポスター制作の2つの主要プロジェクトを通じて成功を収めました。

イヤーズブック制作では、コミュニケーション・イングリッシュ・プログラム (CEP) の各グループがデジタルコンテンツを作成し、レイアウトを設計、協力して最終版を完成させました。これにより、組織力、デジタルリテラシー、コミュニケーションスキルが向上しました。

ブックレポートポスター制作では、学生が小グループで協力し、CEP で読んだ本の内容を議論し、要点をまとめ、ポスターとして視覚的に表現しました。これにより、英語での表現力、自信、要約力、創造力を養いました。

また、B4 光沢紙を購入し、オンサイトでのフルカラープリントを実施したことで、イヤーズブックやポスターの仕上がりが向上し、学生の意欲をさらに高める効果がありました。

全体として、このフェスティバルは英語学習の動機づけ、チームワーク、問題解決能力の向上に貢献し、プロジェクト型学習の有効性を示しました。これにより、学生たちは学業や将来のキャリアに役立つスキルを身につけることができました。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①Project-based learning プロジェクト型学習	②Digital literacy デジタルリテラシー	③Teamwork チームワーク	④Creative expression 創造的表現
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

イングリッシュフェスティバルはイヤーズブック制作とブックレポートポスター制作を通じて、学生に実践的な英語使用の機会を提供し、目標を達成しました。オンサイトでの高品質な印刷により、学生の意欲と発表の質も向上しました。

しかし、時間の制約やデジタルデザインのサポート不足が課題となりました。一部の学生はプロジェクトの完成に苦戦し、より明確なスケジュール管理やデジタルスキル向上のためのワークショップの必要性が浮き彫りになりました。

今後は、時間管理の改善、作業分担の明確化、ピアフィードバックの機会の充実に重点を置き、より効果的な運営を目指します。課題はあったものの、本フェスティバルはプロジェクト型学習の有効性を示し、英語教育において重要な経験となりました。